665-28
1200501573495
65
28

紛失

納本

帝國圖書館藏

窪田空穠著

北海道

北海道人題

昭和九・六・一五 帝國圖書館藏

665-28

序

「まひる野」、「明暗」、「青みゆく空」なぞを集めた「空穂歌集」に讀み耽つて、をこがましくも、その歌集へ所感なぞを書いたのは明治も末年、卽ち四十五年の初春であつた。その時には、その年を最後として明治といふ年號が變らうなぞとは夢にも思つてはゐなかつた。それから既に二十三四年は經過してゐる。その間の内外事相の變遷なぞ、振返つて見れば、まつたく驚くほがはない。

今にして思へば、窪田君はおそらく、「空穂歌集」を一つの時期として、それまでの青春詩想の一切を清算して、實證の世界へはひらう、少くも主情的夢現の境地を實證的批評で照らし出さうとせられたものであらう。詩人等

の轉換期に見らるゝ共通現象である。ヴィクトル・ユゴォがその第三詩集「秋の木葉」で、その青春を送りやつた心境もそれである。逝く春をして逝かしめよといふのである。そして當時の多くの詩人や俳人等が、散文文藝の方面へみづ〳〵しく進出しつゝあつたなかで、たしか窪田君にも「爐邊」といふ短篇小說集があつた筈である。けれど詩人空穗はまつたく實證のみの人ではない。間もなく、深く廣まつた體驗と、この人本來の的確な直感的人生批評とをもたらして、本然の歌人の領域へ立ち戻つて來た。

それより以後、「濁れる川」、「鳥聲集」、「泉のほとり」、「土を眺めて」、「朴の葉」、「青水沫」、「鏡葉」、「青朽集」なぞの歌集を經て、この「さざれ水」にいたる間、それはおそらくこの歌人の第二期の豐富な深刻な展開期であらう。そしてこの「さざれ水」をまた一劃期的識標として、第三期の一層圓熟した玲瓏境を劃出するであらう。限りなく伸びずばやまぬこの歌人の詩的領域こそは、嘆賞の目を刮つて、仰望せずにはゐられぬ。

「言ひぬべき何のあらむや一にこれ我が性格を遂げしめしなり」、まさしくそれである。一切の環境と戰ひつ、、また順應しつゝ、打開し、獲得して來たこの性格を通じての詩的表現こそは、この歌人の中年期の渾然たる統營的所產である。そして、この「さざれ水」一卷を通じて我々の前へ展開せらるゝのは、最近四五年間に於けるこの人の心境の歷史、身邊人事、天然の現象、さらに社會的事象と、それを世界的出來事にまで廣袤をひろげたるものの律動的樣相である。回想、內省、友人、鄕土、學校、野球戰、經濟不況、政變、新東京、國際聯盟なぞ、この一冊の歌集を基礎として、名工ならば、優に大きな一卷の繪卷物をものすることが出來るであらう。歷史家ならば、現代文明史の一篇を書き上げることも出來るであらう。それほどにこの集一冊でも現代文化進展史の必須の一部を構成してゐるのであ

る。その複雜相をこの歌人は自己獨特の勁烈な律調に於て淳化し、醸成して、その淸澄伸達の相を空間に浮び上がらせてゐるのである。抒情詩の形態をもつてこれだけにまで幅廣く具現し得ることは容易な業ではない。

詩歌は言ふまでもなく律調的表現を本質とする。これが繪畫的に偏したり、說明に流れたり、假託譬喩に陷つたりするのは本道ではない。詩歌が象徵的であることは、最大苦惱期の心的經過を表出する時に於てのみ許容せらるゝ。サムボリスムの詩歌は、それが詩歌として完成せられたるものなるが故に善いのではなく、それが人間の心的解放の最大苦惱期の所產であるが故に尊い。この苦惱は停滯を流動へ解き放つ努力であり、そしてその闇夜に一路を求むる者の呼び聲のやうな調べこそは、象徵を除いては表出されぬ。これは單なる假託や聯想や譬喩などではない。命を引きしぼらるゝ者の痛苦である。しかもそのサムボリストの求むるものは何か。「何よりもまづ音樂」である。この樂的しらべに於てこそ、本來の面目はとら

へられ、思念の行く手に一路の微明るさが射して來るのである。

「さざれ水」一卷は、所謂象徵的表出は用ゐない。平明冷朗で、この歌人の心境に浸透し來るもの、その心境の伸展して行く姿、その中心に自我を置いて、遠く描きいだす圓らかな、巨きな、四方を圍む地平線內に起伏し消長する一切を、叙智をもつて撰擇し、直感をもつて感受し、それを自然本來の秩序に整理し、据ゑつけずには置かぬ。よみ据ゑて、動かさず、さりとて凝化停頓せしむるのではなく、本然の流動を萬象を通じて響かしめてゐるのである。その響を所謂しらべといふのであらう。我々はそのひゞきによつて、その詩人を知り、そのひゞきによつて、初めて淳化し整理せられたる萬象の本然の相に接することが出來る。これが律調によつて示された詩的眞實の表現である。この人獨特の勁烈でしかも微妙な顫律、細やかな空氣をふるはせるやうな律動と、そして深い自信をもつて一刷毛にひきのべる空際の一線の如き確調とが合奏して、無限の空間へ向つて立ちの

ほゝ樂音の如きものとなつて響く時、この歌人の本然の相がくつきりと浮び上る。おそらく、この響こそは、永久に細やかに、しかもいつも確かに、宇宙の間に鳴りつゞけて行くことであらう。そして現代の樂耳を持つ人々の胸に共感を呼び醒ますごとく、後の幾代の同じ樂調に身を整へ得る人々の共鳴覺醒を促さずには置くまい。

現實に囚はれすぐれば、眞實は表現されぬ。さればとて、主情的流動にのみ身を委せたのでは、なほさらにそれは出來ぬ。一つは地を爬ふものの蠢動の如く、他は五月の空に消えゆく柳絮の流れの如きものである。實感は詩情のいまだ整理せられざるものであり、主情とは部分的な、偏行した自我の解放である。一つは強すぎるし、一つは弱すぎる。一たび本然の姿に持ち來たし、本來の律調に歸さぬ限り、詩歌はひゞきを立てぬ。現在の、歌人空穗の一首一首は、大自然の構成そのものの一部の如く、ぴつたり据ゑられてゐて、しかもその不動の相のなかに、不滅流動の響を立てて

ゐるのである。嘗てこの歌人があの「空穗歌集」に於て示した、あれほどの浪漫的な奔騰の、盛り切れぬほどの情熱を、これまでに淳化し、均齊化したのは、ひとり時の力のみであらうか。

「土用波高まりつゝも寄せ來るを首さしあげてわが打守る」。これを、かつてこの同じ人の若い日の頃の歌で、どの集に入れられてあるのか、ないのか知らないが、それが出來た時に、口誦するのを直接聽いたのを、今、不圖、思ひ出して比較して見る。「手招けば波も寄り來る磯濱や、白き眞砂に一人はらばふ」といふのである。いかにも好い對照であると考へる。人によつては「手招けば」の方を好むかも知れぬ。これだけの大膽な、强い主觀力があればこそ、それが沈靜して來ると、大自然の一部と身をなさしむる沈潛力を、また擴充性を持つのであらう。テクニックにいたつては、私なぞには說明はつかぬ。また問題とすべきではない。けれど、この歌人の助辭のつかひ方、最後の七音律、及び綴音の自由性、それ等が放散するもの

を引止め、空しく流るゝものを深まらせ、平面を立體に、平調を複音に、つまり深いニュアンスを彫みいだす特殊な效果があるやうに思はるゝ。パルナシアンの詩人等の謂ふ所の「黃金の釘」の光を思はずにはゐられぬ。併しそれ等は實證の問題である。さうした形態がひとり內在の律調をひゞかせるものでは勿論ない。それにそれ等を意識して使用されて居らるゝのやら、どうかは私は知らぬ。それ等を使用することで特殊な律調が出るのでない。特殊なこの人本來の律調がさうしたテクニックを彫み出だすのである。

また、この歌人くらゐ大空をうたふ人を私は知らぬ。「さざれ水」一卷にも、空の種々相をうたつた歌の數十首をかぞへる事が出來る。しかも、そのいづれもが優れた、一首殘らずといつてもよいくらゐ優れた歌である。何故であらう。これをこの人の生ひ立ちの鄕土性と結びつけても、一應の說明はつく。信濃の高原に生れた少年等が、幼年時から眼をあげるとすれ

ば、それに映るのは四方を圍む山岳連亙の姿であり、その連嶺を眺むる眼にいつも伴つてはひるのは、その山顚を劃する、季節によつて色調も表相も深淺多樣に變化する大空である。連嶺と空とを離れては、この高原の兒童等には生きた觀照と好奇との世界はない。彼等の眼はいつも空へ向けられる。山岳を失つた都會地へ來ても、彼等は不知不識に空へ眼を向けずにはゐられぬ。都會人の知らぬ美を空に發見するのである。この「さざれ水」に見らるゝ空の種々相の幾十首を細かに調べて見ることは非常に興味深い事であるが、今はそれは別として置く。けれど、その種々なる空が、いづれも生きて、强く我々の命を支配してゐることだけは言へる。

象徵派の詩宗、ステファヌ・マラルメも屢々蒼空をうたつてゐるが、彼の心眼に映ずる空は死相である。永久の靑さは、卽ち不變の死を示してゐる。いはば、この死相を呈する蒼空にまで達する巨大な闇のドオムの中を、摸索しつゝ辿らしめらるゝのが、彼が不熟な我々に提供する詩境である。然

るに、歌人空穂の空は、まさしく我々日本の空である。我々を照らす、光り充つ空である。「かかる日に生れし我か空白く青葉けぶりて搖ぐともせぬ」。ここにも往時の多少の浪漫的なけはひが殘つてゐると言ふ人があるかも知れぬ。それは關はぬ。それなしでは、現實相の再現以上には出られぬからである。これは抒情詩の最乘のもの、そしてこの青葉のけぶる白き空は、決して蒼い死相ではない。吾生の限り、さらにその後までも、永遠の生面を閃かしてゐるのである。併し空と吾が生とを結びつけるといふことは、山地の高原に生れた人でなければ思ひもよらぬ事かも知れぬ。

現在のこの歌人にとつては迷惑な事かも知れぬが、今後に今一度「空穂歌集」とこの「さざれ水」とを比較して見る。それは、前歌集には多數の新體の詩形が集められてあり、此度の集にはまた特殊な長歌が多くとり入れられてゐることである。前者の新詩形には、短歌では盛り切れぬ奔騰の情熱を、相當自在に展開してあつて、これは勿論、明治の新詩形の發達史の

一部を構成してゐるものではあるが、短歌に於けるほどの獨自性は示されぬ。けれど、それ等の新體詩は、歌人空穂を完成するに役立つものとして考へられ、この「さざれ水」に集めてある長歌は、寧ろ完成した歌人空穂の自在性を示すに役立つものである。敍事的描寫と人生批評とから成る飄逸味の多い「柱の疵」、「父を憶ふ」、「我が顏」の如き、散文詩の上乘なるものである。前の新體詩に於てはまさに出發の相が、これ等の長歌にあつては、その現在での到達境が示されてゐる。この兩者の比較くらゐ劃然たる對照を見せるものはない。

愚痴もなく、さはりの文句もなく、きどつた技巧も消えて、テクニックの苦勞や、表出の努力も見られず、靜かに押へて、淀みなき律調で、悠々と表現してゐる。「空穂歌集」では、それこそ、春、花鳥の舞ふ如く、或は

夏野の果てに崩れゆく夢の殿堂の響に胸をどらせてゐたあの若い詩人が、今は肅然たる立姿で、廣い展望の中心に身を置いて、それも強ひて引きしめるでもなく、自づからなる律調に身を整へてゐるのを見ると、心からなる尊敬を強ひられる。「さざれ水」をまた一劃期として、この到達境が更に自在に展開せらるゝのを、我にもし命あらば、眺めんことをこそ、最大の悅びとしてゐるのである。

昭和九年五月

吉江喬松

さざれ水

目次

題簽　會津八一
序　吉江喬松
昭和四年……三
短歌六十七首
昭和五年……四一
長歌二首
短歌百十二首

昭和六年……二一
長歌十五首
短歌八十五首
昭和七年……一八七
長歌一首
短歌百三十六首
昭和八年……二五九
長歌四首
短歌百六十六首

巻末に

本書は、昭和四年六月から同八年末まで、四年半の間の歌を集めて、「さざれ水」と題して刊行するものである。私の歌集の第十二部目のもので、年齢からいふと、五十三歳から五十七歳に亘つてのものである。

この集は題簽を、秋草道人會津八一君に、序を吉江喬松君に得ることとなつた。いづれも此の集に取つては過分のものである。

昨年の暮のことである、或る會合で、私は兩君と一しよになつた。折柄私は、詠みすてた歌が大分たまつたから、例によつて整理を加へて置きたいと思ひ立つた時であつた。私は試に、會津君に題簽を頼んで見た。如何かと思つたのだが、同君は快く應じてくれられた。

私はその延長として、吉江君に序をと頼んだ。これには多少の因縁がある。同君は詩についての造詣が深く、私は時あつて益を受けてゐるのである。又同君は、私

の歌の批評をしようと思つてゐるともいつてゐた。その批評を、此の際、序の形において書いてもらふ事は、私としては望ましい事だと思ひついた。加へて同君は、私の「空穗歌集」に序を書いてくれたといふ關係もある。それらのことが一つになつて、私にさうした頼みをさせたのであつた。吉江君も快く應じてくれて、健康のすぐれない折柄、強ひて執筆されたのが、卽ち卷首の序である。

畏友の兩君の勞は、この粗雜な歌集には過分なものであるが、その過分は、僥倖の伴つたものである事を言ひ添へておく。

此の集の整理を思ひ立つた時には、刊行は成るべくは手版にして、知人の間に頒ちたいと思つた。それが緣あつて、改造社から刊行される事となつた。

近來の私の歌集は「國民文學叢書」に加へるのが例となつてゐる。これも加へてその第二十四篇とする。

昭和九年五月

窪田空穗

さざれ水

昭和四年

短歌　六十七首

庭

覺めて見る一つの夢やささざれ水庭に流るる軒
低き家

大き石めぐりて出づるささざれ水眼に描く流れ
音をぞ立つる

さざれ水うねれる岸に蕗の薹三つ四つ見えて
小雨に濡るる

さざれ水行きて隱るるこの隈にまばらに立て
る青蓬ども

さざれ水畫をさす日に織る綾の底の眞砂とき
らめきかはす

報酬

報いをば忘れてあれよこの我も親の恩だに返
さであるを

人のため幾何の事を我やせししたに呟く我が
身を愧ぢよ

民政黨內閣成る

行き詰まれる經濟國難打開せむ生を賭してと
濱口のいふ

不況のどん底に喘げ聲呑みて打悚へゐる國民
を見よ

さし當り我が民族がすべき事ただ一つなりと
聞く快さ

明治神宮外苑

六月の芝生廣らに日に照れり寂しさ甘く靜かに歩む

日に照れる芝生の上に椎が落すまろき影あり心寄り行く

六月の日に照る芝生廣らなり遙けき聲は木群の雉か

梅雨の頃

秋草の幼七草押合へる鉢を濡らして梅雨の雨
ふる

今は此處にゐぬものとせし青蛙一つ鳴く聞ゆ
梅雨の夜ふけを

瓶に咲く擬寶珠の花のこぼれたり梅雨に濕れ
る床板の上に

食物

枇杷の皮剝くに剝くれどしみ出づる汁滴りて
持つ指濡らす

大鉢の水に冷せる冷奴生姜とともに口にすずしき

紫蘇の實の二つぶ三つぶ嚙む程に口に殘る甘さ消え失せにけり

暑氣衰へず

立秋を百度に近し門の槻にみんみん蟬の早口に鳴く

裸になり動かずをれど熱き大氣肌にまつはり汗となりて落つ

水打てる土のにほひの暗きより動き來りてわ
が肌に觸る

汗にまみれ入り來し工夫ねぎらへば職ある身
はと喜び笑ふ（又　三首）

アスファルト天日（てんぴ）に溶けて靴底にねばり着く
路を人の群れ行く

幾夜さを子等寢つかぬにせめてもと夜中（よなか）を水
打つアスファルト路に

願望

新しきこの寂しさよ身に添はぬ願望(ぐわんまう)をわれ又
も孕むか

寂しさに打克ちぬべく角力(ず)ひ來しわが心癖猶
なほらぬか

上總大原海岸

海女

沖の浪に黑く漂ふものと見しは牡蠣(かき)採る海人(あま)
なり磯によろめく

潮垂るる籠に背屈め眞日きらふ砂踏みしめて
海女喘ぎくる

濡れし海女強ひ笑ひして我に賣ると凍えたる
手に牡蠣を數ふる

夜の海

夜の濱に腰をおろせば水平線眼に迫りきて闇
のはてしなき

我れ離れ駈け出せし子の廣らなる夜の砂濱に
忽ち見えぬ

夜の海に浮びて高き一つ灯のそのさびしさの
眼放たしめぬ

夜の濱の砂にあぐら居冷えきらぬ砂のさびしく手に弄ぶ

田中の路

走り穂の青田の中の細き路うねれる來れば夕づきにけり

夕闇の穂田の中より捨て猫のいとけなき聲聞えて止みぬ

海につづく穂田廣らなり畦草の蜩釣草を蜩とする子等

蜩釣草形さやけし抜きて持つこの一株を瓶にかも挿さむ

置く露の涼しき踏みて畦行けば濡れては赤き
犬蓼の花

海岸に白井歳次君と逢ふ

クロールをまねべる白井つと立ちて慌てたる
顔に眼鏡のあらぬ

磯浪の騒ぐが中に屈み込み起てる白井の手に
眼鏡あり

浪の下に眼鏡を拾ひ嬉しさに笑ひてやまぬ白
井を見たり

宿れる農家にて

玉楠の木の間にあふぐ朝の空深き緑のしたたり落つるか

海につづく廣田靡かせ吹く風の吹きゆく空に月一つ浮ぶ

折々に

小沼達君を嘆く

稲森の我が顔見るや聲壓へつひに小沼の昨日を死にぬと

涼しさに羞恥まじる小沼の眼吐息つく我にあらはれきたる

稀に見る秀才なりと七年をいたはり心持ちて見けるを

植松安君に

人は皆親を持てども子の誰か父と母との歌の集編む

早慶野球第三回戦の日に

戸塚より起る校歌の夜に入れど聞えてやまずこの目白臺に

冷氣來る

膝のあたり淋しき今朝を押入の火鉢取り出だし火をおこしけり

涼しさの肌へにしるくこの夕べ電燈の灯の疊にし染(し)む

往事を思ふ

すべてこれ我を生かさむ心よりしける事なり何をかいはむ

まさしくも我と我が身を觀ることの緣としなれる人ならずやも

怨をば今は忘れし我なれど命もちては見むと
思はず

秋深し

今日もまた降り續くとか秋空の色のさやけき
忘れなむとす

寒かりし昨夜(よべ)の一夜(よ)に悉く青桐の黄葉(き)落ちは
てにけり

わが童寒げに肩をうちすぼめ今日は映畫も見たくなしといふ

冬晴れ

豐坂の霜どけ路の踏むにすべり喘ぎつつ見る澄める大空

休み日のおそき朝飯すまし來れば階上の室冬日の滿てり

どうだんの枝移りして飛ぶ雀枯葉音立つ移る
がままに

霜解けの濡れたる土の夕かけてさす日に光る
頃としなりぬ

小き家の一室一室を覗き歩き笑顔するなり今
日の客人

前田晁君喪に籠る

冬空の廣きに向ふ部屋にゐて入り行く我に友
眼をあぐる

一目見て心驚くゆくりなく今日を認めし友が
顔の老を

舊き友にいはむ事なく枯芝に日のさす庭を眺
めわが居り

郊外

冬の空冴えて刃(やいば)と打光り枯野のはての大地(だいち)に
突き入る

冬深く大地(だいち)寂びたり常磐木の青きを持てるさ
さやけき家

昭和五年

長歌　二　首
短歌　百十二首

修善寺

温泉宿にて

東京を遠しと思ふ心持ち火鉢におこす堅炭の
火を

日に白き障子の外や我が戀ふる山水ありて音のさやけき

咳いづる身をいたはりてたまたまに障子あくれば日に照る冬山

町を行きて

松山の峽の迫りをうねる川冬深くして水の瘦せたり

源範頼の碑にこの年の今日の冬日のさやかにさせる

富士見が丘

冬山の枯萱原を刈り退けて人が蒔きける青き麥の芽

冬雲の閉し餘せる北の空山あらはれて雪の斑らなる

靜けさのここに極まる冬の山かのかそけきは小鳥の鳴きか

冬山の一本松の葉間よりをりをり舞ひ出る瘦せて細き鳥

姉の手紙

離れ住む姉の文見れば風邪引くな頼むぞよと
書けり古代なる手に

年寄れば兄弟にまさるものなしと喜ぶ姉の遠
く暮すかも

春近し

雨後の濡れて晴れたる冬の空槻の細枝の目に
とめ難し

どてら脱ぎて日向ぼこする縁の上に持ち出し
て据ゑぬ寒木瓜の鉢

胸突坂登りつつ見る椎の葉の葉間に光る春の藍空

悼

吉江せい子の早世をあはれむ

相寄りて悲しむ者も大方は子を死なしける親ならむかも

花の中に埋もれむとする小き顔一目見る眼に
染み入りにけり

不況久し

飯米の賣れ高減りに減ると聞け怒れる聲の市
に起らぬ

食ひし後の事なりといひて借家人家賃拂はぬ
ものの多しと

餓のため妻子殺す者の續けども人苦しきか驚
くとせぬ

獨語

期限ある事務にくくされ、終日を口きく間なく、
同僚と別れて一人、ふらふらと通りを行けば、ゆ
くりなく胸衝きあげて、獨語口より出づる。　物
いへばいふが樂しく、樂しさのものいはするに、
べらべらとしやべり續くる、でたらめの筋立た

ぬ事。我を見て人の笑へど、我が口は追ひかけ
追ひかけ、獨言(ひとりごと)しやべり續けて、止めむとはせぬ。

爲事の後

事一つなしをへけりと思ふ時かそけき音を時
計の立つる

事一つなしつと吐息つくやがて湧くさみしさ
の爲(ゐ)む術(すべ)のなき

次姉の病を見舞ふ

病む姉を心に持ちて汽車にあれば思ふことさびし姉は死なぬを

病む姉と目を見合して肉親の怪しくも深き思ひに觸れぬ

病む姉と目を見合してありけるが心弛みて笑ひ出だせり

遠く來て姉の片方に一夜を寢輕口つきて別れも行くか

父を

今をわれ如何にすべきと惑ふ時顔あらはさす
世にあらぬ父

わが父の形見の寫眞色うすれ今は複寫の出來
ずとぞ聞く

不況打開

わが友の商人風間、この頃の生活難を、しみじみ
とかこちたる後、細き目より火花を放ち、歪めし
口徐ろに開き、この上は貨幣を廢すか、交通機關
撤し去るべし、人間の求むるところの、幸福はそ
こより來らむ、笑ひ事にあらずよ君と、口つぐみ

思ひ入りをり、老いたるわが友。

春深き頃

櫻花白く咲きたれど目白臺春の曇り深く雀も
鳴かぬ

水鉢に生き殘る金魚今日をさす春日さしとほ
り際やかに赤き

落羽めく物を咬へし一つ雀草青き庭を舞ひ立たむとす

春の空青く光れりいづくにか一つ雀の高鳴きつづくる

春深く若葉きはやけきわが庭に今日据ゑしめぬ伊豫の青石

護國寺境内

照り廣き初夏の光に躑躅咲き重なる紅の暗からむとす

咲き重なり咲きつづく躑躅日に照りて燃ゆる眞紅の坂を壓する

初夏の一日

曇り空雨を含みてほの白し枝なき梧桐若葉むらがらす

山の手の初夏の夕べの音なきに鳴らしつづくる童の口笛

田山花袋氏告別式に

負ふところ少なからざる君なりとさみしみつつも香を炷き繼ぐ

後の代に殘らむものはいささかぞかにかくにとて物書き繼がしき

大患の後に

暫くは遊びたまへと我がいふに否と忙しく首を振らしぬ

稲森宗太郎君の死後に

我が生くるこの朝夕にかくばかりかかはり持てる稲森なりしか

わが心空虚とはなしそこをしも己が在所とするや稲森

心籠め言葉となさばこの嘆き紛れなむかと唯
に思ひつつ

氣の腐り今は如何ともし難きにさみしくあら
はる稲森が顔

四十九日忌に

稲森が好める花の菖蒲生け四十九日の今日の
さみしき

或日

相繼ぎて親しき人の死にけりと胸咽びつつ今
日の飯食ふ

初夏の風

懶くて動き難くもゐる我に涼しき風の止まず
吹きくる

懶さの極まる我やこころよく吹きくる風に吹
かれて悲しむ

駒澤九品佛

根もとより枝を張りたる大銀杏六月の日の青
くけぶれる

赤土にまばらに立てるひよろひよろ草大寺の
屋根照る日に朽ちぬ

夏木立小暗き奥の萱の堂金色(こんじき)の佛ひろがりいます

梅雨ぐもり

ひめ睡蓮小き圓葉(まろは)の四葉五葉鉢に浮びてくもる朝空

人の居ぬ米屋の店の暗きより慌て舞ひ出す一羽の雀

梅雨曇り深き夕べを炷き殘す香のありしと我
が探しけり

梅雨時の夜氣ひややかに蚊やり香細く眞白き
煙を立つる

梅雨空の今宵眞暗く我が住める山の手町に起
る音のなき

鉢の睡蓮

まことにも水換へければ姫睡蓮今朝さき出で
ぬ澄みたる水に

澄める水に白く咲きいでし睡蓮の我といとほ
しみ夕べはしぼむ

しぼみたる睡蓮見れば懇ろに莢もて包むその
花びらを

子が旅立

兄がゐる上總の海に行きなむと幼かりし妹(いもと)ひ
とり家を出づ

バスケット重き提げては家出(い)づる娘をあはれ
め父は送らず

暑熱强し

一つ蟬聲沈まして鳴き繼げり目に入る屋根瓦
きらめき渡る

母の忌に

母が爲と今日を供へし餘りもの人の世さみし
く靜かに我が食ふ

上總大原の海

間借せる農家

我が住むは空が圍める小き萱屋子等海に行き
てわれ一人なる

夏の空地平に垂れたり眼に近き一群篠竹空に
して搖る

空圓く地平に垂れぬ幹見せて一本立てる老い
し玉楠

我が行くは田中の小路夏空のかがやく綠の地
平に垂るる

晝寢すと寢て眼をやれば生垣の葉間に見えて
光る夏空

木立古りし家に我が來て風に鳴る青葉の音を
今日は喜ぶ

打搖らぐ青葉見上げて膝抱へ涼しき風に包ま
れ我がゐる

柿痩せて疎らなる枝低く垂る日にきらめける
砂庭の上に

家刀自が捕りきて飼へる轡蟲庭の砂熱く晝を
音鳴かぬ

鹽田川せまき板橋夜を渡り目下にし見る夥し
き星

海岸

沖の方高まり極まる波の穂に現れて黒し一つの體(からだ)

青波の高まりくづるる白き穂に身を載せてくる數多の童

砂をもて造れる大き寢像あり水着赤き子避(よ)けては遊ぶ

汽車より

砂畑にごろりごろりと轉(ころ)がりて寄りどころなしや末生(うらなり)西瓜

小庭

冷氣來ぬと驚く今朝を庭苔の緑あざやかに延び擴ごれり

秋さびて庭木衰へぬいや高くいや新しき芭蕉の葉かも

秋さびし庭つめたくも雨の降りいささかの萩白く咲きいでぬ

秋さびて荒れたる庭の水鉢に咲きし見出でつ睡蓮の花

友に

「美穂」の編者、豐嶋晃君に

君が美穂百號となりぬと告ぐる文身にしみて
讀みぬ信濃の晃

たはやすき事と思はね望む事しつつあるなり
信濃の晃

町の童

露草の花めづらしみ崖見上げ脊伸びしてゐる
町童(まちわらべ)ども

相競ひ脊伸びはするも童ども手は及ばぬよ崖
の露草

絶食療治の後

空(す)ききりし腸(はらわた)にしむこの番茶一口一口惜しみ
つつ飲む

山崎剛平君より盆を贈らる

播磨に名ありし松の枯れし惜しみ盆に作れる
その盆の一つ

川越市

喜多院に詣づ

西武藏古りし川越の町行けば家毎に咲けり大
輪の菊

喜多院の路教ふると店出で來(き)饂飩屋の翁(おきな)事懇ろにす

宋版の一切藏經紙白く文字(もじ)あざやかに秋日に披ける

その邊りの野

打ちつづく大根(だいこん)畑(はたけ)の畦毎に菊咲かしめぬ西武藏人(びと)

大根畑(だいこんはたけ)つづきて廣し我が耳に入り來し音は牛の唸りか

黄に染める楢の林に夕日滿ち分け入らまくも奥遙かなり

目白臺秋深し

目白臺に住む久しやと小路來て黄となれる銀杏あふぎたりけり

秋の霜一度下りしにこの臺の青桐の木立皆黄となりぬ

熱海

雙柿舍を訪ひまつる

客に應へ逍遙先生秋深き庭見やりたまふみ眼の涼しく

御幸村

老楓深きくれなゐ重ねてはほとほと隱す澄む
山の空

冬來る

とたん廂に響つめたき冬の雨火鉢に炭を繼ぎ
足しぬべし

冬晴

初冬の朝日明るき住宅地花賣の鋏澄みて鳴り
來る

初冬の朝日明るき部屋にゐて勤に出でむ時間
と思ひぬ

冬の門に蹲る犬歸り來し主人を見れど起たむ
とはせぬ

冬の日の南に廻ればわが籠る廂淺き部屋光な
らぬなき

凶報

川崎杜外君の凶報を讀みて

知れる人相繼ぎて死ぬをさびしむに杜外の妻
も死にしといふか

伊藤英二君の訃に接す

上京せむ二三日中(ちうち)にといへる君こは訃報なり
その日も過ぎぬに

いつの日も若き瞳をかがやかす君を五年(いつとせ)六年
や見けむ

故里の野の苅萱を根こじ來てわが家の庭に植
ゑにける君

秋田縣境町村の遙けきを君死ねる日にわが嘆
きけり

鄕里の不況を聞く

松本市本町通りの大店の店あけたるは二軒の
みとぞ

肥料商蠶あがりの懸け寄せて二萬圓より十圓
を得しと

理髪師に料やりければ喜びて今は呉るる者ほ
とほと無しと

長野縣大銀行は擔保品生絲値なきに驚きまど
ふと

路上

オートバイ方向轉換示さむと男手を伸べ身を
くねらする

歳末に

世の險しさ心に響き時として本閉ぢしめし今年の逝くか

昭和六年

長歌　十五首
短歌　八十五首

流行感冒

味噌汁の出來のよきをば喜びて獨りわが食ふ
いささかの飯(めし)

冬の夜の夜更けとなりぬ銀煙管(ぎざる)口に冷たし熱
あるらしき

寢ては讀む今朝の新聞東京の流感患者七十萬
とぞ

熱あればすへざるものを懲りずまに枕もとの
煙管(きせる)また取りにけり

伊東

温泉宿にて

階上の室(しつ)を繞らす春の樹に姿ひそませ鳴くは
鶉(つぐみ)か

山の空に鳴くうぐひすの遠聲の細りて消ゆる
尻聲聞ゆ

山畑の畦にて

怪しくも心引くかも畦草の杉菜すかんぽ紫雲
英蘖蔓ども

すかんぽの莖折り取りて老いしわれ嚙みに嚙
むなり涙ぐましく

畦草の蘖蔓もくもくと繁りたり幼ごころ湧き
て寢ころがりたき

こぼれ種の菜種の二本花咲きてひよろひよろ
立てり伸ばす足の先に

豐坂上

眼をあげて今日見る我の上にあり美しきかも
初夏の晝空

移ろひの止まざる世にし我の生き驚きて見る
今日の初夏の空

事に觸れて

言ひぬべき何のあらむや一にこれ我が性格を
遂げしめしなり

稲森宗太郎君一週忌に

ひよつこりと此の席に來て稻森も物食ひをり
と心思はむ

路上矚目

白躑躅咲きつづく庭を七面鳥尾羽打廣げ搖らぎつつ行く

土手を占めぞくぞく立てる鐵道草初夏の光のくるめきさし入る

手綱振りて牛の横面人打てり打たるる牛の身
動ぎもせぬ

郷里なる嫂みまかる

生まれしより今日に至る五十餘年我を心に懸
けたまひし人

嫂を圍み子ども兄弟打泣けり劣らぬ縁の我も
ありしかも

我が父の生みの子よりも重んぜし人なりけり
と今日の嫂を見る

謹みて葬りのわざ我がすべき終りの人ぞ謹み
仕へむ

農村の故舊に逢ふ

屈托顔寄せ集めたる老い人らぽつりぽつりと
物いひかはす

かく生きてあるが怪しと暗き顔幼くなして男
の笑ふ

陰鬱の染みこめる顔さし寄せてしみじみと我
に笑むなり嫗

故里の家

たまたまに遠く歸りて、故里の家をし見れば、庭に老ゆる春の木立は、幼くて見しに變らず、庭に向ふ小き離室(はなれ)の、父母(ちちはは)の住みたまひしが、しめ切りし障子の白く、春の日のさせるを見れば、我が胸に生きつづけては、面變(おもがは)りしまさぬ父母(ちちはは)、その

障子あけなばいまさむ惑ひせらるる。

早慶野球戰

戰ひて戰ひぬける決勝戰息をしつけばサイレン鳴り出づ

いさぎよき捷を獲にける早稻田選手涙こぼして顏あげられずと

三日間連投しける投手伊達友は泣き止めど猶泣きゐると

戰へば捷ちぬべきなり俄にも轟きいづる早稻田の校歌

庭前

朝空の廣きに向ふ青楓(あをかへで)搖らぎてやまず泳ぎか
出づる

知れる處女を悼む

散歩にと寮出でしてふわが處女(をとめ)七夜(ななよ)を經れど
歸り來らず

梅雨(つゆ)曇(ぐも)り暗き夜更けを遠く行き由井(ゆゐ)が濱べに
立ちしかをとめ

生きの身を厭ひ果てしか純にして執強き人と
たふとみけるを

肩ゆすり高く笑ひしその姿かくもわが目に耳
にあるものを

魂合へる友にもいはでありしてふ君が心のあ
はれに悲しき

眠らむとする童

とろとろと寝入らむとする手童の慌てて目を
あきあたり見廻す

寝入らむとする手童の眉顰め何思へかも固く
眼を閉づ

鈴蟲

神樂坂の夜店に買ひて、部屋に飼ふをさな鈴蟲、共にゐる三つの一つの、いち早く鳴きいだしては、つゆの雨さみしき夜を、聲澄みて鳴きつづけしが、又の日は鳴かぬに見れば、籠脱けて逃げ去りにけり、鳴ける鈴蟲。

蜩

門前の槻の木蔭に、集ふ子等の騒ぎのやみ、豆腐屋のラッパの聲の、近寄りて遠ざかり行けば、目白臺わが住むあたり、ものの聲殆とあらず、夏の夕の重き陰鬱、おもむろに漂ひくる時、蜩のさやかなる聲、身に近く俄に起れり。鳴き繼ぐ一つ

蜩、澄みとほる聲の刻みの、涼しさを滴らしくるか、鳴き繼ぐ一つ蜩、涼しさを滴らしつつ、その空を廣くもするか。目白臺夏の夕べを、あるものはひとり鳴き繼ぐ蜩の聲。

物干し竿賣る爺

物干し竿二本かつぎて、炎天を賣り歩く爺、猿股に襦袢のみ着し、太り肉の赤目の爺、我が門の犬におびえて、呼びてくれ押へてくれと、どもりつつ我にいひしが、この竹を買ひてくれよと言ひ足しぬ爺。

圓タクの助手

圓タクの料金五十錢、又はそれ以下となれる頃

通りを流す圓タクの助手、窓より此方を見おこし、片手いだして指を動かす。もの言はぬ指動くに言葉をいだす。その指は三本と見え四本と見え五本とも見ゆ。その動き忙しくして、五本と見え四本と見え三本とも見ゆ。巧みさの

おもしろく、思はずも笑ひいだせば、大き圓タクつと方向を換へ、我が前に來ては重重しくも止れる。

怒れる猿

檻の猿に薤やれるに、その心に物ありとすや、一皮剝きて棄て、又一皮剝きて棄て、棄て棄てて心にいたりて、俄にも怒りいだし、白き齒を剝きて叫ぶ。そを見て我の笑へど、笑ひつつ我とさびしも檻に怒る猿よ。

三峰山の夕べ

三峰の頂に來て、み社ををろがみまつり、見晴らし臺登らむものと、裏門をわが出でくれば、清しもよ我が眼さへぎる、夏山の青瑞山。前なるは白岩山、並びてはやや遠く、大洞山雲取山、その山の百重前山、峽つくり重なり合ひて、我が立てる

眞下の谷に、落ち入りて裾をぞ引ける。　めでたしや山の濃淡、己がじし異る青の、溶け合はむ色のいみじさ、その峽にかかれる雲の、一すぢの眞白薄雲、消えぬべき細りの末を、際やかに見せもぞする。　立たずみて我が見てあれば、ゆくりなく鳴き出る蜩、澄みとほる一つの聲の、わが峰の空に響くに、見晴らし臺行くを忘れて、ただ一人立ちつくしたり、裏門のほとり。

高山と人

三峰の社に宿り、尿しつつ窓の外見れば、谷底より立てる檜の木の、竝び立つ老いたる幹の、眼に近く眼に平かに、尿する我に迫れり。　あさましき樣するものかも、人間われは。

下駄の臺

奥秩父にて

相迫る荒岩山の、岩が根をめぐりて出づる、中津川清き河瀨の、澄みとほる水の面の上に、何物ぞゆくりなくしも、流れ來るものこそありけれ。小く白き長方形の、同一の形せるもの、繼ぎ繼ぎにあらはれ出でて、青き水の面埋めなむとす。

土地の人われにいふらく、こはすべて下駄の臺なり、水上の大瀧村は、桐の材の良き産すれど、運搬の便惡しきより、かくしてぞ秩父に出だす。簞笥ともなるべき材の、下駄にのみただにせられて、一足五錢の値もて、秩父にて取引きせらるると。所得ぬ大瀧下駄も、流るるに嘆きはあらず、我が前の青淵の上に、一つ一つゆくらに寄り來、或物は動き行く時、或物は岩肌に憩ふ、或物は動きつづけて、憩へるを後より衝けば、憩へるは驚

き動くに、衝きたるは動かむとせず。　淵の水岩乘り越えて、瀧と落つる下つ瀨見れば、こは何ぞ大瀧下駄、瀧壺の打騷げるに、止まりて群り遊ぶ。覆ることと面白く、くりかへし覆る物よ。　逆立ちて倒れし物を、まねびては逆立つ物よ。　その樣を羨み見ては、後の物岩走せ下れば、瀧壺を押出だされて、前の物名殘を惜しむ、或物は岩に止まり、友の遊び見下しをるに、瀧壺を出づる忽ち、或物は行手を急ぐ。　大瀧より秩父に至る、中津川

千萬隈の、一隈のこの瀨を過ぐる、大瀧下駄眺めて我は行手忘れぬ。

炭運ぶ童

奥秩父にて

十二三の小學學童、青白き細面の子、堅炭の大俵の、三四貫あらむを背負ひ、腰屈め息杖持ち、馬行かぬ片岨道の、危きをふらふらと來る。　里の婆そこ過ぐる我に、問はざるに童が上いふ。　あの童にあはれなる事あり、學校の休み休みに、あの

如く炭を背負ひ、一日に五錢を得、得し金を竹筒に入れ、積み積みて二圓となしぬ。　母なき子の母の代りと、蠶の手傳ひに行き、歸れば留守の間に、竹筒は盜まれたりけり。　泣き嘆きてありける童、この夏の休の間を、あの如く又も炭背負ふと、見送りつついふ。

山の食物

奥秩父にて

食べものに事は缺かずよ。　山焼きて蕎麥蒔く日には、里人ら擧りて手傳ふ。　多き家は種一斗五升、收穫八石、少きもそれに準せり。　女手に粉に挽き、かにしかくにして食ふ。　そのほかの物は知らぬに、働きのはげしかれば、山より歸りて

食ふ、その蕎麥のいたくうましよ。　山かせぎの代もて買ふ、米麥のなきにはあらず。　物日には溫飩も食ひて、かくのごとよき色せりと、日にやけし顔撫でさすり山人の笑ふ。

市の胡桃

木立多き山の手町、我が住む目白臺、行くところ槻の木の立ち、樫の木の老いしが茂り、松の木の古きが殘る。　豐川町女子大學前、乘合自動車の停留場、ただ一木太く立つ木の、幹直に枝葉繁く、眞夏の空暗からしむる。　この蔭に自動車待つ

人、眼をとめて見むとはせず、何の木と試みに問へど、青年はほとほと知らぬ。　その上こを植ゑし人、秋をみのる實を待ちけむが、幾秋をこの下行けど、我もその落つる實を見ず、東京の町に殘され、忘られて一木立つなり、目白臺の胡桃。

父を憶ふ

悲しくもわれ、人間の相場を知りぬ。　知らむとし知るまじとせる人間の相場、明らかに胸に映り來ぬ。　偶像を求むる心と壞つ心との矛盾せる二つの心、共にわが身の内にありて、若きより今に至る久しき間を相剋しけるが、いつの日か

剋せるもの和し、和せるもの消え去りて、ここに求むべく壞つべき偶像のあらず、あるは唯高からぬ人間の相場のみ。

わが父よ、三十年前みまかりたまへる父よ。　人見ば一老農に過ぎざりし父よ。　若き日の眼もて親しく視、老いし日の心もて具に味へば、高き相場ささげまつるべき存在と我が父は見ゆ。

今の我が悲しき心は、ただ我が父によりて慰められる。

酷暑

肌ざはりあらき縮(ちぢみ)に着かへてはごろ寝しにけり疊の上に

さし曇りむし暑き空憎みつつ枕提げては部屋移り歩く

暑中休暇をはる

久しくも見ざりし顔を寄せ集めにこやかにゐるあなたこなたに

黒みたる顔撫でまはしほがらかに笑へる人よ何をか話す

前首相の訃

前首相濱口死すと家の者夕飯食ひさし顔見合はする

新聞の寫眞に知れる濱口の顔現れて眼の前を去らぬ

酷評に面直向けおもむろに歩み寄る人の濱口を見ぬ

腫物

眼に寄せてまたも見てゐき手の指の痛むとも
なき小き腫物を

塗藥しみる痛さや庭にする蟋蟀の聲に耳を集
むる

地震

中學の屋根に登りて、ペンキ塗るペンキ職工、空
の下に一人小く、這ひまはる樣面白み、體操する
初年生の群、にこにこと上目をせるが、俄にもゆ
り來る地震、ゆりゆりてそを搔き亂す。　空に搖
るる屋根の瓦に、平み着くペンキ職工、兩手合せ

何をか拜むに、校庭に脚踏み張りて、搖られゐる
初年生の群、眼(まなこ)据ゑ大き口開きて、聲立つるなき。

氣管支カタル

身のだるさこらへ難くもなりくるに腹立たし
くて家を出で來ぬ

家出でて路には立てどいづこにか足向けしめ
む弱りたる身を

フランスパン行きて買はむかと佇めり秋日照
る路の眩しくも長き

屋敷木の樫が落せる濃き蔭の秋日照る路に涼
しくつづく

いささかの路歩み來て心さみし熱き茶を飲む
立てつづけにも

熱病にて籠る

枕より見出づる空の眞青なりさやけかるらむ
野に立ちて見ば

病みづかれ持ちて出で來し秋の町人目に入り
て堪へざらむとす

病みてわれ在り經るままにせむとする事ほと
ほとに無くなりにけり

柿紅葉

潛り入りし雀のありて夕日さす柿のもみぢ葉
ところどころ搖るる

庭の木の八つ手が重ぬる葉の上に黃に積りた
り柿のもみぢ葉

庭苔の青きに散れる柿もみぢしぐれの雨の冷(つめた)く濡らす

柿の木の散り殘る葉の五葉六葉夕日さし來てくれなゐとしぬ

青桐

家間(いへあひ)の狹き通してさす夕日逆(さかし)まに照らす青桐の黄葉(きは)を

この部屋に見やる青桐澄み深き空に浸(ひた)りて眞(ま)黄(き)となりぬ

小庭

鵙の聲空にするなり暮しよき國をと探し渡り
かも來し

目白臺の空を眞北に渡る雁稀に見る雁の四五
十羽かも

水鉢に蹲り見入る小き猫赤き金魚のあらはれ
沈む

苔の上にこぼれて白き花びらを山茶花と見れ
歩み寄りにけり

目白臺俄に湧ける薄霧を秋の夕日のさし照ら
したり

姪の夫丸山峻秀君を嘆く

死ぬべくはあらぬ年をと悲しみを押し返しつつ君をし怒る

驚きも日を經てさみし君が妻の泣きゐる顔のわが目に懸る

稀に逢へど話もあらぬ無口人怪しくも心足らはしめたり

豐嶋園

青空にかそけき音の立つ聞え槻のもみぢ葉肩に散りくる

池の邊のほほけ穂薄澄む水に白く沈めり高空と共に

鳥小屋に飼はるる家鴨首さしのべ近づく我に鳴きて寄りくる

秋空の寒きに向ふ大プール青き水照りの沈みて搖らがぬ

初冬の光しみ入り石神井川水草の藻の衰へにけり

枯薄つづける中の路來れば耳に入りくるせせらぎの音

柱の疵

信濃なるふる里の家、生まれては育ちける家の、板の間の圍爐裏に近き、太柱さやかに目に見ゆ。午の鐘鳴るに集る、春の日の晝飯の時、上座にと坐れる父の、その柱に眼をばとどめつ、下座にある我を見おこし、この柱疵つけけるは、まさしく